

最近、海洋化学研究所のお手伝いをするようになって以来、「石橋先生は、何故、誰も体系づけようとしなかった海の化学に興味をお持ちになったのか」という質問を受けることが多くなった。これに関しての京都大学時代の研究の発展と御業績は、「海と湖の化学」(京都大学出版会, 2005, p. 386) に詳細に記述されているので省略し、海洋と石橋先生を別の面から紹介したい。

先生は九十九里浜、千葉県海上群矢指村椎名内現在の旭市で御出生になった。その出自、石橋家と海の関係を探るにつれて、海は、御幼少の頃より、先生の心の中に大きく位置づけられていたのではなかったかと推測されるようになった。筆者は、東大海洋研初代白鳳丸に乗船、南十字星航海に参加、船の図書室で揚繰網の石橋太郎兵衛氏の業績を知った。帰国後、この話を石橋先生にすると先生は非常に喜ばれた。石橋太郎兵衛氏は御祖父であったのである。

さて、明治初期の漁業は、社会経済の発展に伴い、魚類の需要が急速に増大するとともに、それまで、沿岸に限られた水域で営まれていた地曳網漁業は、漁場が沖合に移り、漁撈技術が段々と高度化されるに従い、徐々に衰退の過程を辿った。このため、多くの網元、網主は、漁網の調達と漁船の手配のために相当な資金を必要とし、地主的、保守的な経営者となり、新しい漁業技術の担い手とはなり得なかった。

一方では、このような状況を脱却、漁具、漁法を開発し、沖合漁業を試みようとする進歩的な網元、網主があった。先生の御祖父、石橋太郎兵衛氏(1849~1922)(9代目法華屋太郎兵衛御襲名)その人であり、従事する漁民の新しい指導者であった。(日本近現代人名辞典, 吉川弘文館, 2004年版)。同氏は、明治19年、東京湾で使用されていた群集する鯛漁の漁撈法6人網を観察、6人網(2人で一隻の網船に乗り、二隻で魚群を囲み、手船に二名乗る漁法)に周到な改良を加え、明治21年、魚群を囲み捕獲する揚繰網(あぐり網)を創作、改良揚繰網と命名し、沖合漁業での操業を可能にした発明者であった。改良揚繰網は揚繰網の改良ではなく、6人網の改良の意であり、後日、改良の字句が省略され、揚繰網と通称されるに至っている。この網は、長さ106間、巾21.2間ほどの麻網で、漁船2隻、漁夫27名を要したが、沿岸地曳網が数十人から百人の漁夫を要し、魚群が沿岸に回遊するのを待たねばならないという欠点に比べ、軽便で沖合でも迅速な対応ができ、その

* (財)海洋化学研究所 所長

上、網に環をつけて締め綱を網裾を通し魚群を逃げ出さないように工夫された巾着網の一種で、漁獲率の良い漁網であった。明治25年には、地曳網の網元が、新しい網は営業妨害をする網として使用禁止を県に請願をしたほど高能率で沖合漁業に最適で軽便な網であった。さらに、漁獲能率が高いことは、経営的に有利であったため、短時間で、全国への普及が著しく、明治29年、千葉県では、「九十九里浜ノ各漁村ニ於テハ、益々改良揚繰網ヲ製スルノ有様ナルヲ以テ、今後尚大ニ其数ヲ増加スベシ」といわれる状態になっていたという。現在、同氏に対し、地元民が建立した丈余の石造の顕彰碑を旭市でみるができる。(中村吉次郎；日本水産新聞昭和19年8月2日、石橋定次郎；揚繰網発明の真相、昭和17年7月10日、二野瓶徳夫；日本漁業近代史、平凡社選書188、山口和雄；日本漁業史、東大出版会)

最近、筆者は金沢大学を訪問する機会を得た。石橋先生が第2代金沢大学学長として揮毫された、石川門にあった梅林石の旧大学標石は、角間キャンパスに移設されており、暫しの間懐旧の思いに耽った。敗戦後、国敗れても青少年への教育はなおざりにできない国の大事であると、時の東久邇首相へ建白書を送られた話、城のある大学は金沢とハイデルベルヒだけだと述べておられたのも今は昔、卒業時、「若竹の伸び行く空の広さかな」と希望と期待に膨らむ私共に、励ましの句を戴いたことも過ぎ去った日の一駒である。海洋化学研究所を設立、理事長として運営されていた研究所は今も引続き活動している。石橋研究室で見たり聞いたりするなかでも、先生と海は、切っても切れない関係にあったのだと今更ながら痛感している。海洋化学研究所の将来の益々の発展を心から望んでいる次第である。